

英国図書館研修報告

かみや ゆうこ
神谷 優子
(メディアセンター本部)

1 はじめに

2023年9月から12月末までの約4か月間、英国イングランド東部ノリッジにある、セインズベリー日本藝術研究所リサ・セインズベリー図書館に受け入れていただき、英国を中心とした欧州の日本研究図書館などを訪問する機会を得た。慶應義塾大学メディアセンターの英国図書館研修は2012年より始まり、筆者で9人目となる。2019年までは毎年行われていた研修プログラムであるが、新型コロナウイルス感染症（以下「コロナ」とする）による世界的パンデミックの影響を受け、2020年よりこのプログラム自体が停止されていた。2023年5月にコロナウイルスの感染症法上の位置付けが5類に移行されたことを受け、筆者が4年ぶりに派遣されることになった。

この研修の特徴として、慶應からの派遣者が一方

的に学ぶだけでなく、訪問先の日本語資料を所蔵する研究図書館において、必要とされている業務支援等を行うことで、両者にとって得るところが多いという点が挙げられる。筆者は目録担当としての業務歴が長いので、目録作成をはじめとしたテクニカルサービスの業務支援を行いながら、英国ほかヨーロッパ諸国の図書館などを訪問し情報共有を行うことを目的の一つとして本研修に臨んだ。また、会議の出席や、オンラインでの研修参加などを通し知見を広げることも大切な目的と位置付けていた。

研修・訪問先と詳細日程は、表1のとおりである。これらすべてを紹介することは難しいため、本稿では参加させていただいた会議と、いくつかの訪問先について報告する。

表1 日程と訪問先

日程	訪問先
下記以外の期間	セインズベリー日本藝術研究所 リサ・セインズベリー図書室
9/11	日本国大使館 広報文化センター図書館
9/13-9/16	日本資料専門家欧州会議 (EAJRS) (ベルギー)
9/26	イーストアングリア大学 (UEA) 図書館
10/3-10/13	大英図書館
10/30	Japan Library Group (JLG) 会議 (大英図書館)
11/13	大英博物館
11/14	ナショナルギャラリーライブラリー
	ナショナルポートレートギャラリーライブラリー
	ロンドン大学アジア・アフリカ研究学院 (SOAS) 図書館
11/15	コートールドライブラリー (コートールドギャラリー)
	大英図書館
11/16	UEA (東文研客員研究員によるギャラリー・トークと講演会)
11/17	ナショナルアートライブラリー
11/22	オックスフォード大学 ウェストンライブラリー
11/27-11/29	ベルリン国立図書館 (ドイツ)

2 会議

(1) 第33回日本資料専門家欧州協会年次会合

日本資料専門家欧州協会（European Association of Japanese Resource Specialists, 以下「EAJRS」とする）は、日本資料に関心を持つヨーロッパの専門家による団体である。1989年に設立され、その目的は、ヨーロッパ各地の日本研究機関の情報交換、また日本からの情報入手とその促進および普及にある。1990年からは毎年9月に年次大会が行われており、2023年は9月12日から15日まで4日間の日程でベルギーのルーヴェンにあるルーヴェン大学にて開催された。参加者は会場参加とオンライン参加を合わせて101人で、英国、ドイツ、オランダ、ノルウェー、フィンランドの大学図書館員や日本研究所員のほか、ヨーロッパ以外からもアメリカ、カナダ、そして日本（国立国会図書館、国立情報学研究所、国文学研究資料館など）など、計14か国の参加があった。2023年度のテーマは「Adapting to Changing Trends in Japanese Studies：日本研究の時流に適応する」であり、日本語11本、英語17本の計28本の発表があった。また発表と並行して、書店や日文研など8つのベンダーなどが開催するワークショップも開かれた。さらに、ルーヴェン大学でのレセプションに加え、市内見学、ベルギーの伝統料理を楽しむディナー、ルーヴァン・カトリック大学の見学などのアクティビティも用意されており、筆者も参加することができた。



図1 EAJRS：発表の様子

筆者はこれまで、利用者と直接対面する機会が少ないまま、図書館員としての勤務歴を重ねている。そのため、このEAJRSの場で、研究者を支える各国の図書館員や研究所の方々と交流できたことは、視野が広がり、刺激にもなるとても貴重な機会であった。研修の最初にこのような場に参加できたことは、今振り返って大変意義深かったと思う。

(2) JLG meeting

英国日本図書館グループ（The Japan Library Group in the United Kingdom：JLG UK）は、日本研究と図書館の分野における専門知識を集約し、また相互に情報交換することを目的として、1966年に設立された団体である。当初は、ケンブリッジ、ロンドン、オックスフォード、シェフィールドという4つの大学図書館に加え、後に大英図書館の一部となる大英博物館図書館及び国立科学技術貸出図書館を中核として設立された¹⁾。現在ではSOAS、リサ・セインズベリー図書館、日本国大使館広報文化センター図書館などもメンバーとなっており、年に2回の会合を開き、英国における日本の学術コレクションに関する現在の問題について議論している。



図2 大英図書館

筆者は、10月30日に大英図書館を会場とし開催された会合にオブザーバー参加した。各図書館の半期の状況を報告しあい、時に意見を交換したり共感したりするこの会合は、日頃1人の職場など少ないス

スタッフの中で働いていることの多い図書館員にとって、とても大切な場になっていると感じられた。

3 英国内図書館訪問

(1) 大英図書館



図3 キングズ・ライブラリー（大英図書館）

大英図書館（British Library）は、約2億点の資料を所蔵する世界最大級の国立図書館である。1973年、大英博物館図書館とその他のいくつかの国立図書館が統合して誕生した。法定納本制度で指定された英国国内に5つある納本図書館の1つであり、英国とアイルランドで発行されたすべての出版物が取められている。

筆者は、こちらのAsian and African studiesというセクション内の日本部において、6日間にわたり様々な業務に携わらせていただいた。このセクションでは選書・受入・目録作成・支払いといったいわゆるテクニカルサービスが行われている。さらに、大英図書館所蔵資料の目録を電子化するなど、様々なプロジェクトも行われている。今回、その中の1つである通称「川瀬目録」に関する作業を行った。また、非英語・非アルファベット言語の資料担当者間で言語問題について考えるプロジェクトのオンラ

インミーティングへの参加もなかった。他にも、葛飾北斎に関するイベントを台湾の図書館と検討している広報部や法務部との打ち合わせにも参加した。大英図書館で生じる「日本」に関するすべての業務がこの日本部に集約されているという。ただ日本語のできる担当者は少ないため、すべてに十分時間をかけることは難しいであろうと感じられた。大英図書館であってもやはり人員に余裕があるとは言えない現状が垣間見られた。

大英図書館の中央に設えられているのは、キングズ・ライブラリーである（図3）。本好きだったジョージ3世が、世界各地で集めさせた書籍などの一大コレクションであり、その数は約8万5千冊から成る。図書館員にとっては、壮大で圧巻の一言に尽き、何度目にしても心が躍る光景である。

(2) ロンドン大学コートールド美術研究所図書館



図4 コートールド美術館

コートールド美術研究所（The Courtauld Institute of Art）は、1932年に設立された美術史及び美術品の修復に関する、世界でも名高い研究機関である。ロンドン大学の構成組織であり、美術史に特化した教育および研究を専門としている。また、コートールド美術館も併設している。この美術館は英国の実業家サミュエル・コートールドが収集したルネッサンスから20世紀にかけての美術品、ゴッホの「耳を

切った自画像」, マネの「フォーリーベルジェールのバー」などが展示されている。研究所は大変美しいサマセット・ハウス内に設けられている。この中庭にはアイススケートリンクがあり, 訪問した日がちょうどリンク公開日でクリスマスデコレーションされた景色も大変印象深かった。

訪問時には, 作業の最中であったWitt Library及びConway Libraryのコレクションをデジタル化するプロジェクトについてお話を聞かせていただいた。数年かけて行われている大規模なプロジェクトであるが, 実作業の多くにフェローや学生などのボランティアが関わっているようだ。ボランティア内でリーダーを決め, きちんとした仕組みを作り, それを代々引き継ぎながら長く続けているのだという。気の遠くなるような数の資料を手作業で行う地道なデジタル化作業の一部を見せていただいた。関わっている方々が生き生きと話して下さっていた姿が印象的であった。

(3) ナショナルアートライブラリー



図5 ナショナルアートライブラリー閲覧室

ナショナルアートライブラリー (National Art Library) は, サウスケンジントンにあるヴィクトリア

& アルバート博物館 (Victoria & Albert Museum, 以下「V&A」とする) 内に併設されている国立美術図書館である。V&Aは, 1851年のロンドン万国博覧会を契機として, 翌1852年に産業博物館の名で誕生した。その後美術と産業の融合に熱意を傾けた故アルバート公 (ヴィクトリア女王の夫君) にちなんで, 現在の名称となった。現在, 世界の陶磁器, 染織, 家具等工芸全般にわたる所蔵品150万点以上をもつ世界有数の美術館であり, 大英博物館と並ぶ英国の代表的国立美術館である。そこに併設されているナショナルアートライブラリーは, もとは中央デザイン学校の付属であったが, その後上述の産業博物館に組み込まれ, 1860年頃に現在の名称になった。工芸美術関係の中心的な図書館としての役割と, 現在に続く英国で最大規模の公開美術図書館としての役割を持ち, 英国でも重要な位置を占めている。この図書館の強みは, 網羅的に所蔵している文書資料とその内容の深さにある。大小様々な規模の美術館やギャラリーの展覧会カタログ, オークションハウスの販売カタログを多数所蔵していて, さらに現代の業界文献や現代アーティストに関する文書なども積極的に収集している。

閲覧室はV&Aの2階に位置し, 85席を有している (図5)。写真映えする大変美しい場所である。一方, 書架は増設を重ね, あらゆる空間を使った複雑な作りになっていた。

こちらの図書館においても, アジア部門のスタッフの少なさが問題となっている様子であった。日本語に関する知識が豊富とは言い難いスタッフが日本語資料の目録を作成する必要に迫られているようで, その苦労は想像を超えるものがあると感じられた。

4 ベルリン国立図書館訪問

(1) ベルリン国立図書館の歴史

ベルリン国立図書館 (Staatsbibliothek zu Berlin, 以下「Stab」とする) は, 1661年に設立され, 現在はプロイセン文化財団が運営している。1913年にウンター・デン・リンデンに1号館ができたが, ここが東ベルリンとなったため, 1978年に約2km離れたポツダム通りに2号館が建設された²⁾。2号館の建物は, ベルリン・フィルハーモニーも手がけたハンス・シャロウンの設計によるもので, 中はとても

明るく、解放的な雰囲気となっている。閲覧机、書棚、階段などいたるところに美しく芸術的な装飾が施されているのも特徴的だ。

東西分断の歴史を経て、Stabには約1,000万冊の蔵書がある。現在、1号館は研究所図書館として、2号館は一般用図書館としての役割を担っているため、1号館には1955年以前の出版物や地図、児童書などを、2号館には1955年以降の一般的な出版物を所蔵している。

図書館の創設者であるフリードリヒ・ヴィルヘルムは、東アジアに対して並々ならぬ興味を抱いていたと言われている。その支援によって、大量の中国書籍が17世紀に当時の宮廷図書館へもたらされた。一方、当時鎖国政策を取っていた日本から書籍を入手することは、非常に限られた範囲にとどまっていた。19世紀までに同図書館に収蔵された日本の作品はわずか4点にとどまり、うち2点は現在も保管されている。Stabの東アジア部が所蔵する日本古典籍コレクションは、2021年の時点でおよそ1,000点にのぼる。そのうち約100点は1860～61年のプロイセン使節団遠征で入手された品々である。



図6 ベルリン国立図書館2号館

(2) 日本部の業務

2号館にある東アジア部内の日本部にて、様々な業務を紹介していただいた。この日本部では、まず利用者教育として、ベルリン自由大学などの日本学を専攻している学生にむけて行うイントロダクショ

ンを特に重要視している。さらに官庁出版物の国際交換という事業も大切にしている。日本から海外へ送付可能な官庁出版物のリストが出された際に、Stabではヨーロッパ以外の言語の官庁出版物は、各言語を扱う部署がリクエスト資料を選定する。非売品資料も多く、それ自体が人気のある資料だが、さらにこのリストを選書の参考資料として使うこともあるという。海外で日本の出版物について知るためにこの事業は大変有益である。また、選書業務や件名・分類付与、典拠作成、さらにILL対応など、「日本」や「日本語」に関連するものはすべて、この日本部へ資料が回ってきている。

また、ドイツの北部を中心とする7州にまたがる図書館ネットワークとして、GBV (Gemeinsamer Bibliotheksverbund) という存在がある。目録業務において、図書は、このネットワークの目録データベースであるK10plusを使っている。これはStabのOPACであるStabKatとは連携していないため、別途登録作業が必要である。また典拠システムも別に維持している。雑誌は、ドイツ語圏で利用しているZDB catalogueというユニオンカタログを使っている。図書と雑誌で使用しているシステムが別々で、さらに複数のシステムへの登録が必要、さらに雑誌は、製本単位の書誌・固有タイトルの書誌・雑誌タイトルとしての書誌をすべて作成するなどきめ細かな対応をしている。加えてExcelで原簿を管理するなどスタッフにとっては細かな負担が少なくない。しかしながら、日本部に図書は2名、雑誌は3名の専任の目録作成者が在籍していて、他の日本研究を扱う図書館に比べると人員は比較的恵まれている。さらにNACSISやWorld CATなどの外部書誌を有効に使い、データをダウンロードした後に手間をかけず取り込めるようなシステムを独自開発するなど、効率的な業務を可能とする工夫も随所にみられる。その結果、きわめて迅速に対応できている様子が伺えた。

(3) 専門情報サービス

ドイツ国内の主要な図書館には「専門情報サービス (Fetch Informationsdienst)」というものが確立しており、サービスの柱となっている。これは国が指定した図書館が、網羅的にひとつの分野を集中して収集するというもので、それらの資料類はドイツ

全体に提供する義務がある。分野は多岐にわたるが、たとえば「中東・北アフリカ・イスラム研究」や「教育科学と教育研究」といったものがある。Stabの東アジア部は、「日本学」分野を割り当てられている。これは、前述のように、プロイセン王国の頃から日本に関する資料が多く収集されていたという経緯による。東アジア部では「CrossAsia³⁾」というサービス名でサイトを運用し、データベースやILLサービスなどを利用者に提供している。予算は、国以外にドイツ研究振興協会からの助成などもあり、いくぶん余裕があるように見受けられた。

このサービスが上手く成り立つためには図書館と利用者の密な関係が重要であるという。日本部の利用者はドイツ人の日本学研究者がメインであり、その数が比較的限られていることはサービスを提供する図書館の側にとっても好都合だ。また、日本学者協会、社会学者協会とのつながりを密にして、こういったサービスの存在をきちんと知らせていることも利用者との連携を取っていく上で非常に効果的だという。担当者からは、利用者との関係において、日本部は問題ないと笑顔で教えていただいた。

また、分野間でサービス内容に差が生じているという現状もある。たとえば「法学」などは、研究者も多いため、利用者の求めるものに対して希望に添えないようなこともあるという。一方、東アジア部が担当している「日本学」については上述のようにユーザー層が限られている上にスタッフの努力もあり、手厚い対応ができています。またこのサービスへの利用登録も、他の分野は修士課程以上であったり、研究所単位であったりするが、日本学については学部生、しかも個人単位から認められている。サイト上での検索システムについても予算に余裕があるため開発を重ねられ、プロジェクトなどの際には専門の職員を臨時で補うこともできる、データベースも積極的に導入できる…など充実のサービスとなっている。国の方針としてのシステムが確立している辺りにも、ドイツのお国柄ならではのきっちりした仕組みが見受けられ、非常に羨ましく感じられた。

(4) 言語の問題

これは日本国外の図書館の多くに共通することであるが、非アルファベット言語であり、分かちの扱いなども難しい日本語資料には多くの問題がある。

Stabでは、日本語資料の書誌であっても、場合によって、タイトルの漢字形を「検索できるが表示されないフィールド」に入力するなどの措置を取っているという。館内のOPACでは現物の表記とは異なるローマ字がまず表示され、注記事項など日本語の入力自体が不可能な箇所もある。業務用のチェックインシステムもローマ字しか表示されない。1号館を訪問した際に、ユニオンカタログに関わっているスタッフともお話をさせていただいたが、もちろん日本語ならではの言語の問題は理解しているし、対応したいと考えてはいる、が現状はなかなか難しいのだそうである。雑誌担当者の「まずは(現物通りの)漢字表記が大事だと理解してもらうことが大切」という言葉が大変印象的であった。

5 海外の日本研究図書館が抱える問題点

世界における「日本学」は決してメジャーな研究分野ではない。ただ、その熱が下火になっているわけではなく、今なお積極的に研究を続けている研究者は多くいるという。そのため、彼らの研究を支える専門知識のある図書館員の存在は、想像していた以上に重要であると多くの面で感じる事ができた。さらに、こういった日本学研究を衰退させないよう、連携しながら力を入れ、積極的に行動されている図書館員が世界にたくさんいるという現状を知り、大変心強く感じられた。ただ残念ながら、長らく言及されているように、世界、特にヨーロッパの日本研究図書館員の数は減少し続けている。「日本担当」のスタッフが退職した後に「アジア・アフリカ担当」といったように、日本に特化した人材が登用されないことも少なくないのだという。加えて、キャリアの終盤を迎えているスタッフが多くなっていく状況もある。スタッフの優れた能力と、積み上げてきた経験をきちんと引き継いでいける後進の育成の必要性は大きく、急務であるといえよう。一方、筆者の立場で日本からできることは限られているかもしれないが、日本国外からのNACSISやOCLCへの需要に対応するには、より多く日本からの登録を増やすこと、さらに日本でどのようなサービスを行っているかを海外に向けて発信していくことが大事なのではないかと感じた。

6 リサ・セインズベリー図書館



図7 セインズベリー日本藝術研究所

訪問先の締め括りとして、研修期間の3分の2を過ごしたりサ・セインズベリー図書館での日々について触れたい。これまでの派遣者も述べているように、ノリッジは中世の街並みが残された、大変美しく趣深い街である。そのシンボルともいえるノリッジ大聖堂の膝元で過ごした日々は、鐘の音とともに決して色褪せない思い出となった。こちらでは、日本関連資料の書誌修正作業、また書庫の狭隘化対策として、資料の移動作業を行った。さらに、粛々と進められているデジタル化のサポートも行った。また日々の業務の合間に、ヨーロッパの現状などについてもいろいろな観点からお話を聞かせていただいた。大変有意義な時間となったことは言うまでもない。

7 終わりに

4か月の研修期間を通じて、世界の中で「日本」がどのように理解されているかを客観的に知ることができた。日本にいただけでは得られない貴重な経験になったと思う。また、セインズベリー日本藝術研究所という日本芸術の知識の宝庫にいられたこと

で、現代文化のみならず、浮世絵や仏像といった古くから愛されてきた日本の芸術文化についてもこれまでになく触れることができた。研究所フェローや客員研究員の方々から多くのことを教えていただき、日本への理解を広げることもできた。

帰国後の日々の業務で薄れてしまっていたが、この原稿執筆を経て、ノリッジで過ごし、感じた思いを振り返ることが出来た。日本で何ができるのか、今後どのようにつながりを維持していけるのか、今一度心にとめ努めていきたい。まずは見聞きした状況をできる限り知らせていくことが大切なのではないかと考えている。

最後に、今回の研修全般のコーディネートをして下さったりサ・セインズベリー図書館の平野明さん、温かく迎え入れて頂いたセインズベリー日本藝術研究所の皆様、忙しい業務の中、受入れて下さった各図書館のスタッフの皆様、また快く送り出してくれたメディアセンター本部、特に目録担当の皆様にごこの場を借りて感謝申し上げたい。そして、母（妻）の4か月の留守を何とか無事に乗り切ってくれた家族にもお礼を言いたい。

参考文献

- 1) Yu-Ying Brown. The Japan library group in the U.K. Japan Forum Pages, 5:2, p. 257-261, DOI: 10.1080/09555809308721491.
<https://doi.org/10.1080/09555809308721491>
- 2) ブッセ・エルネストゥス原著. “ドイツの図書館：過去・現在・未来”. 東京, 日本図書館協会, 2008, p. 127-137.
- 3) “CrossAsia”.
<https://crossasia.org/>